

あいち国際女性映画祭 2015

デイリーニュース vol.5(2015/9/5)

フィルム・コンペティション グランプリ決定！！

【長編フィルム部門】 金のコノハズク賞(グランプリ) 『彦とベガ』
銀のコノハズク賞(準グランプリ) 『I AM THE PEOPLE』
【短編フィルム部門】 金のカキツバタ賞(グランプリ) 『きつね憑き』
銀のカキツバタ賞(準グランプリ) 『FRESH MINT』、『笑門来福』
観客賞 『FRESH MINT』

昨日のトークから

『うるう年の少女』

天野千尋監督

主演女優
小崎愛美理さん

「この作品の撮影期間中に妊娠が発覚しました。心配をかけたくないという思いと、この作品を完成させたいという思いが強かったので、周囲の方には報告をせずに撮影を進めました。」と、天野監督。主演女優の小崎さんは妊娠を隠す監督の行動に誤解をする点もあり、「報告して欲しかったです(笑)」と笑い合っておられました。作品について天野監督は、「時の流れを速く感じ老いることへの怖れから、4年に1度しか年をとっていないつもりの女の子に焦点を当てたため、この作品名になりました。わがままで愚かな主人公であるエミだが、一心不乱に夢を追う姿に自分を投影し描きました。」と論じられていました。小崎さんは「見る人・状況によって解釈が異なる部分があり、感じ方も様々となる作品です。」と続けられました。終始笑顔の絶えない和やかな雰囲気で行われたトークショーでした。



『あえかなる部屋』

内藤礼と、光たち』

中村佑子監督

「現代芸術家の内藤礼さんにとって世界はどう見えているのか、彼女の芸術から自分たちは何を受け取れるのか、そう感じてこの映画を撮りたいと思いました。」と中村監督。「途中、資金が少なかったり、内藤さんの撮影がストップしたりと、100人いたら100人も諦めてしまうような状況に陥ることもありましたが、内藤さんの芸術から受け取ったものが大きく、映画製作はやめられませんでした。」そして、撮影がストップしたあと登場させた世代の違う5人の女性について、「私自身の分身でもあり、内藤さんの芸術の分身でもあるのではないかと思います。」と語られました。観客の皆さんは、存在するということの不思議さや儚さをこの作品から受け取り、また、暗闇の中で燃える炎や水の動き、西日の中に消えてしまいそうなシモーヌ・ヴェイユの写真など、繊細で幻想的な映像にも魅了されていました。



『0.5ミリ』

安藤桃子監督

エグゼクティブプロデューサー

奥田瑛二さん

「いつも姉妹で登壇だったので父娘では珍しいですね。」と桃子監督が言えば、「目立つなって言われてたから。」と父・奥田プロデューサー。打てば響くデュエットのよう。「昨年の映画賞ほぼ制覇して、メジャーに勝てるインディ映画を志しているインディの監督たちにとっては革命的なことなんです。でも私は「こっからだぜ」って思ってます。」と桃子監督。「私、安藤サクラってこんなにスゴイ女優はいないと思っていて、当然主役はサクラしかないと。奥田さんと三人で現場にいるわけですが、姉妹して「奥田さん、口出さないでくださいね」と牽制しましたね。姉妹は阿吽の呼吸で子どもの時から二人三脚でやって来てるのでいいんですけど、父娘となるとカチンとくることもある(笑)」。父曰く「プロデューサーは監督の意図をくみ取っていい現場づくりをするのが仕事ですからね。仰せの通りに(笑)」



『福田敬子-女子柔道のパイオニア』

柔道家 山口 香さん

「福田敬子先生は53歳の時に渡米なさったので現在の日本ではほとんど知られていません。女子で初めて9段になられた94歳の時報道されたので、今お会いしておかなければとサンフランシスコのお宅に伺いました。海が見えるレストランで食事をしたのですが、その時先生が「この海に向こうには日本があるといつも思っていたけれど、もう帰れないわ」とおっしゃったんです。女子柔道の歴史は福田先生の歴史です。それを帰国してぜひ日本人々に生で伝えてほしいと動き始めました。映画はちょうどそれと連動する形で作られることになりました。福田先生は柔道に選ばれてその使命を果たした方です。そのために柔道か結婚かを選ばざるを得なかったのですが、そのおかげで今の女子柔道があります。先生のおっしゃった「いい柔道」を次に伝えていくために私たちも頑張らないといけないと思っています」



明日の見どころ

下記の上映作品は2回目の上映です。好評の3本ですが、見逃した方もう一度見たい方、ぜひお見逃しなく！

『愛する人へ』

10：00～11：40/ウィルホール
アメリカを拠点に世界的な人気を誇る歌手のトーマスは、レコーディングのために故郷のデンマークへと戻ってくる。そこへ現れた娘のジュリーは、薬物依存のリハビリ施設に入ると言い残し、孫のノアを置いていってしまう。突然の同居に戸惑いながらも、次第に孫との距離感が縮まっていくが……。家族を顧みなかったミュージシャンとその孫。寒さ厳しい冬のデンマークを舞台に、家族の「重さ」と「希望」を描いたヒューマン・ドラマ。



©Rolf Konow



©Illustration by Victo Ngai

『ギフト』

13：30～15：00/大会議室
物語の軸となるのは、誰もが知っている日本の昔話「鶴の恩返し」。助けられたツルは、その感謝の気持ちを「ギフト」で示そうとする。この昔話が美しいアニメーションで語られ、実際に傷ついた動物たちと、彼らを助ける人間たちとの実話を織り交ぜて描かれる。この寓話が進むにつれ、互いに救われていく人間と動物。大自然の北海道に飛来する丹頂鶴のシーンは圧巻の映像美。幼少期を日本で過ごした監督リンダ・ホーグランドの不思議な縁が導いたドキュメンタリー。

『シアター・プノンペン』

(旧題:遺されたフィルム)

10：00～11：50/大会議室
女子大生ソポンはある日、映画館でふと目にした古い映画に若き日の母が出演していたことを知る。女優であった過去を隠し続けてきた母。その映画の最終巻は欠落していたが、そこには映画関係者が粛清された不遇の時代、クメール・ルージュ時代があった。ソポンは亡くなった映画関係者とカンボジア映画界のため、また女性の自立支援のために再び映画の結末を作り直すことを決意する。



まつかわゆまの耳寄り情報

『ドラゴン・ガール』9月6日16時10分よりウィルホールにて上映

ブルネイ初の長編商業映画がなんで女子高生の恋と武道もの、しかも女性監督なんだろう…素敵すぎる(笑)。ブルネイといえば、イスラム教国で、三重県ほどの国土に多くの地下資源があるため、所得税・住民税がない金持ち国として知られています。本作のヒロインは金持ち私立学校から公立学校に転校することになった活動的な女の子。シラット・チャンピオンになった幼馴染に近づくためシラット部を作り全国大会を目指します。公立学校は学費も安くイスラム教をもとにしているのので長いスカートとスカーフが制服。ファッションも行動もアメリカナイズされた私立学校とは大違い。しかし、さすがブルネイ。公立校に通う高校生たちもベンツやトヨタ、SUVで通ってくるのです、おおっ。と妙なことに感心してしまいましたが、青春ものとしてもスポーツサクセスものとしても、さわやかで魅力的な作品です。ブルース・リー気取りの弱小シラット部顧問など笑いもあり、カンフー映画ファンにも楽しめるでしょう。

今日のプログラム

4階 ウィルホール

10:00～ 『第三の男』&戸田奈津子さん特別講演

14:00～ ザ・レッスン/授業の代償

16:30～ 運命というもの

18:50～ 兄弟

3階 大会議室

10:00～ 共に生きて *上映後トークイベント

(斉藤綾子セレクション)

13:20～ 接吻泥棒

15:30～ あらくれ *上映後トークイベント